

地域から学び、地域に活かす

ーリベラル・アーツ教育と新発田ー

山 田 耕 太

1. 地域循環型教育

大学は中世12世紀の修道院の「リベラル・アーツ教育」を土台にして、パリでは神学の専門教育、ボローニャでは法学の専門教育、サレルノでは医学の専門教育が誕生したことによって始まった。オクスフォードやケンブリッジでは、現在も修道院の面影を残す中世以来のカレッジ群が、町のあちらこちらに見られる。だが、中世の大学発祥の頃は、ガウンを着ていた学生・教師（Gown）と大学のあった町（Town）は、学生が酒を飲んで暴れたりして地域住民に迷惑をかけ、町は治外法権を主張する大学構内での事件などに手を焼いて、しばしば利害関係が対立していた。そこで大学は、現在もハイデルベルクなどに遺構が見られる学生牢をつくって自治権を守った。オクスフォード大学の始まりに見られるように、町の教会で教授会が開かれるという一面もあったが、大学の草創期では「町と大学」（Town and Gown）はしばしば犬猿の仲にあった。しかし、時代が下るとともに町と大学の関係は次第に改善されていき、今日ではそれは昔話であったかのように全く様変わりした。現在では地域社会と大学は密接な関係にあり、大学なしに地域社会は発展せず、地域社会なしに大学の存在は成り立たなくなっている。敬和学園大学では地域社会と大学の関係に先見的な視点で着目し、大学が地域社会を教室としてそこから学び、学んだ成果を地域社会に還元する教育を「地域循環型教育」と名付けて、さまざまな領域で取り組み始め、また取り組みを深めつつある。

2. リベラル・アーツ教育とは何か

「リベラル・アーツ教育」は、大学の草創期において大学教育の土台であったが、現在に至るまで大学教育の根幹を成している。「リベラル・アーツ」という言葉は、ギリシア語の「円環的教育」（enkyklios paideia）に由来する。それをラテン語で表現すると「アルテス・リベラーレス」（artes liberales）すなわち「リベラル・アーツ」となり、そこから「百科事典」（encyclopedia）という言葉も派生した。⁽¹⁾

「リベラル・アーツ教育」は、第一に、古代ギリシアの自由人教育に由来する。古代のギリシア・ローマ社会では、自由人の教育として「自由七科」あるいは「自由学芸」と呼ばれる科目群が教えられていた。それは「文法」「修辞学」「論理学」という文系三科と「幾

何」「代数」「音楽」「天文学」という理系四科で構成されていた。これらの「円環」を成すバランスの取れた知識を身につけることによって、スペシャリストではなくジェネラリストとして育成し、円満な人格を形成することを目的としていた。

第二に、自由七科の文系三科は、元をたどるとストア学派の「言葉の学」に遡るものがあり、それは言葉を操り、説得的な議論と正しい議論と推論を身につけることを目的としていた。その過程で、特に「文法」の中の上級文法では、ギリシア・ローマ社会の「哲学」「歴史」「文学」を素材として学んだ。それらは中世以降では「人文学」(humanitas)と称されて、後の「人文科学」(humanities)の柱を構成していった。自由七科の理系四科は、ピュタゴラス学派・プラトン学派の「数学的宇宙論」と称することができる数学に裏打ちされた「世界観・自然観」に遡る。それは後に、ルネサンス期以降の天文学や物理学や化学などの成立と発達に伴って自然科学的世界観・宇宙論に置き換えられていった。

第三に、近代では近代社会の成立とともに、自然科学の方法論を導入して人間社会を分析する「社会科学」が加わり、古代の自由七科による「リベラル・アーツ教育」に相当するものは、「人文科学」「社会科学」「自然科学」と領域を広げ、また学問の境を越え、さらにこれらの学問領域を超えるものに発展している。だが、基本的にはそれらによって培われる「言葉の学」と自然科学に裏打ちされた「世界観・自然観」であることには変わらない。そこでは「人間の学」である「人文学」に象徴されるように、究極的には「人間」が問われているのである。

以下では、敬和学園大学の教育理念の核心をなす「キリスト教主義リベラル・アーツ教育」の先駆者である三人の新発田人を取り上げてみることにしたい。

3. リベラル・アーツ教育と新発田(1) ダンテ学者、山川丙三郎



日本で最初のダンテ学者で中世英文学のバラードを最初に教えた英文学者の山川丙三郎は、1876年(明治9年)に山川経邦・えきの三男として蒲原郡(その直後に北蒲原郡に変わる)加治村(後に加治川村となる、現在は新発田市に合併)上館に生まれた。地元の加治小学校(後の加治川小学校)と新発田町商業学校を卒業し、1889年(明治22年)に北越学館に入学し、そこで三歳年上で近郷の五十公野出身の出村悌三郎と出会った。出村悌三郎は後に英文学者となり、第三代東北学院院長になった人物である。山川丙三郎は1892年(明治25年)にキリスト教の洗礼を受けた。同年に北越学館が閉校すると出村

梯三郎と歩いて仙台に向かい、東北学院予科に編入学し、その後に本科生となった。学生時代は労働会に入って新聞配達や牛乳配達などをしながら苦学した。本科を経て、1897年（明治30年）に東北学院文科専修部（英文）を卒業すると同時に、東北学院図書館図書係となったが、1899年（明治32年）に上京して、憲兵司令部付の陸軍の通訳となった。

その後、1904年（明治37年）に渡米し、カリフォルニア大学バークレー校の特別科に入学し、中世英語・古代英語やイタリア語なども学び、中世文学の講義や当代随一の高名なダンテ学者の講義にも連なった。1908年（明治41年）にはアメリカの高校で教える資格の高等教育資格試験に合格した。その後、ダンテの『神曲』への理解を深めるために神学を修めようとしてバークレーの太平洋神学校に入学したが、志半ばにして1年半で退学し、1911年（明治44年）に帰国した。帰国すると東京・雑司ヶ谷で新井奥邃が主宰する謙和舎の読書会に出席しその門下生となり、極貧の中で友人たちの物心両面の支援の中で『神曲』の翻訳に没頭した。新井奥邃は明治維新の頃から30年近くアメリカで暮らして帰国したキリスト教の神秘的思想家であったが、謙和舎の門下生の中には、足尾鉍毒事件で有名になった田中正造もいた。

1914年（大正3年）には、我が国で最初に『神曲・地獄篇』を警醒社から出版した。翌1915年（大正4年）には北蒲原郡本田村本田（後の豊浦町本田。現在は合併して新発田市本田）の医師渡辺護・善の長女なおと結婚し、極貧生活は変わらなかったが妻の支援により訳業が進み、1917年（大正6年）には『神曲・浄火篇』を警醒社から出版した。同じ年には中山昌樹がダンテの『神曲』全訳を出版したが、それは英訳からの重訳であった。山川丙三郎訳は原語のイタリア語からの翻訳であり、しかも三行詩で書かれたダンテのスタイルをできるだけ忠実に日本語に移そうとした訳業であった。1919年（大正8年）には、出村梯三郎の斡旋で東北学院英文科教授に就任し定職を得てようやく生活が安定し、1922年（大正11年）には『神曲・天堂篇』を警醒社から出版した。『神曲』に続いて、1929年（昭和4年）にはベアトリーチェとの関係を綴ったダンテの『新生』を岩波書店から出版した。これらの『神曲』と『新生』は戦後には岩波文庫として出版され、現在に至るまで版を重ねている。

我が国にはダンテの『神曲』の完訳は、世界でも稀なほどに多く現時点では8種類あり、間もなくもう一つの完訳が出版されると思われる。それらの中で山川丙三郎訳は、最も優れた訳として定評がある。山川丙三郎は、訳業が出来上がる度に精神的な師である新井奥邃に献呈したが、新井奥邃は毎回『神曲』の各部の本質をついた深淵で簡潔で禅の偈のような霊的コメントを筆で認めた。そこにはダンテの『神曲』という世界文学が生み出されてくる霊性（スピリチュアリティ）を彷彿させるものがある。なお、大空社の山川丙三郎訳『神曲』復刻版にはこの霊的コメントが付いているが、岩波文庫版では削除されている。

山川丙三郎は1940年（昭和15年）に東北学院定年退職し、名誉教授となったが、戦後に『神曲』の改訳を志してその訳業の道半ばで、1947年（昭和22年）に71歳で永眠し、仙台の北山墓地に埋葬された。東北学院大学の図書館階下の閉架書庫にはダンテ文庫があり、東北学院でかつて教えた山川丙三郎の偉業は覚えられているが、その故郷の新発田では長い間忘れられた存在である。新発田市近隣に住む遠縁のわずかな遺族の他には、そのことを知る人はいない。

4. リベラル・アーツ教育と新発田（2）農民運動の父：井伊誠一



農民運動の父と呼ばれる井伊誠一は、1892年（明治25年）に弁護士の井伊小平太とツイの間に新発田本村近隣の川東村（現在の新発田市川東）で生まれ、三の丸小学校（現在の外ヶ輪小学校）、新発田中学（現在の新発田高校）、仙台の第二高等学校を経て、東京帝大法学部で学んだ。大学一年生の秋に弓町本郷教会でキリスト教の洗礼を受け、大学卒業後に神戸の保険会社で2年勤務した後に、1922年（大正11年）に30歳で新発田に帰郷して弁護士事務所を開設した。

その直後に木崎村で起こり、新潟地方裁判所新発田支部の法廷で争われた小作争議に小作農の代表者の依頼を発端にして関わり、片山哲らと共に小作側の弁護士として小作農民を弁護した。地主の真島桂次郎らは永井庄吉らを弁護士としたが、法廷闘争は1923年（大正12年）から1930年（昭和5年）まで続いたが、最後には和解した。その間の1926年（大正15年）には賀川豊彦を校長とした木崎農民学校が一時開校したが、それを支援した。このような弁護活動の中で1927年（昭和2年）には労働農民党から出馬して県会議員選挙に初当選して政治活動にも携わっていった。やがて社会大衆党の議員となり、合わせて県会議員を3期務めた。その後、1946年（昭和21年）の戦後の最初の衆議院議員選挙で日本社会党から出馬し初当選し、日本国憲法制定時の片山内閣時代には衆議院法務委員長、憲法特別委員を務め、政界を勇退するまで衆議院議員を7期務めた。

また、新発田に帰郷して弁護士事務所を開設した当初から、日本基督教団新発田教会の日曜学校教師・校長を長く務め、戦前・戦中・戦後は新発田教会の執事として、とりわけ太平洋戦争中の困難な時期に眼科医の大塚憲治と共に教会の柱として支えてきた。1968年（昭和43年）の敬和学園発足時から1975年（昭和50年）まで学校法人敬和学園理事を務めた。最晩年は病床についていたが、1985年（昭和60年）に92歳で永眠した。

衆議院に初当選して数年後の1947年のノートには、個人的メモとして以下のような「私の信念」が記されている。その中に、新発田市に対する抱負と教育・文化・民主的都市のヴィジョンが示されている。

私の信念

- ・ 一市民として
- 1. 新発田市民に慧知と品位を与えるため、学校を起こしたい。
- 2. 教会と幼稚園を成長、発展させたい。
- 3. 図書館に利用上の改革を加えたい。
- 4. 市全体を清潔な文化都市に改造したい。
- 5. 青年に希望の途をひらき、市会を若返らせたい。(注：市会とは市議会のこと)

5. リベラル・アーツ教育と新発田(3) 図書館・図書会館を献げた坪川^{かんぺい}洵平



新発田市の中心地で文化的な核となっている図書館と図書会館(現在の市民文化会館)を献げた坪川洵平は、1874年(明治7年)に坪川瀨平とクイの三男五女の末っ子として外ヶ輪裏(現在の城北町二丁目、自衛隊の真裏)で生まれた。1891年(明治24年)に三の丸小学校を経て、北越商興会付属新潟商業学校を卒業し、東京・神田の活版印刷所に就職した。その時に菅谷出身の高橋光威の訳した『貧児立志伝』の「ピーボディ伝」を読んで感動し、自分も故郷に図書館を寄付して第二のピーボディになりたいと密かに決意した。ピーボディはカーネギーやロックフェラーやモ

ルガンなどに多大な影響を与えた人物である。なお、高橋光威は、その後に政治ジャーナリスト(福岡日日新聞編集主筆 他)を経て代議士として活躍し、原敬内閣の内閣書記官長(現在の内閣官房長官)という要職に就いた。

その後横浜で貿易商に携わり、その取引先の関係から1896年(明治29年)から開行間もない住友銀行神戸本店に勤務し、兵庫支店勤務時代にはピーボディと同じようにキリスト教の洗礼を受け、その後広島支店に配属になった。それぞれの転勤先では教会の役員として会計係をも担った。その後、1903年(明治36年)には住友銀行が横浜支店を開店し、その配属となり、1908年(明治41年)には銀行の取引先との関係で東洋商会社長の成毛金次郎と出会い、スカウトされてその会社に入社し、そこから破綻しかかった西成製紙に出向して、1911年(明治44年)には西成製紙社長となって会社の経営を立て直した。1928年(昭和3年)には三菱製紙の前身である浪速製紙の代表発起人として会社を設立

した。翌1929年（昭和4年）には破綻しかかった東京・大森の金山製作所を生まれ故郷新発田の地名の外ヶ輪（とがわ）から名前を取って戸川製作所として再建し、新発田出身の人々をその会社で雇用した。

坪川洵平は17、18歳頃の決意を約30年近く経って50歳代半ばに実行していった。すなわち、1928年（昭和3年）11月に新発田町に新発田町図書館（現在の新発田市立図書館）を寄贈し、翌1929年（昭和4年）4月に新発田町図書館が開館した。その当時は本が高価であり、手に入れるのは地方では困難な上、まだ町には財政的余裕がなく公立図書館がある町は極めて少なかった。坪川洵平は図書館で本を通して学ぶばかりでなく、本を通して過去の偉大な魂に触れることを願って故郷の町に図書館と書籍を寄付したのであった。また、図書館開館10周年の1938年（昭和13年）には本を通して学んだことを議論したり発表したりする場所として図書会館（現在の市民文化会館）を寄贈した。すなわち、本を通して文化を創造する場を提供したのであった。図書館と図書会館の間には樹木を植えた公園として、その中央には噴水を作り、そこで緑陰読書もできる市民の憩いの場とした。当時の姿は現在では新発田市立図書館の一階ホールに置かれた模型によって偲ぶことができる。図書館と図書会館は、それぞれ1986年と1980年に現在の新発田市立図書館と新発田市民文化会館として建て替えられていったが、それは現在も新発田市の中心地として市民文化会館と図書館の敷地として残されている。坪川洵平は、その後も新発田町役場の建物を寄贈し、商店街のイルミネーションなどを寄付したが、本人は江戸時代末期の旧家を立て直すこともなく、清貧の生活を送った。

1944年（昭和19年）には戦争で新発田に疎開し、1952年（昭和27年）には名誉新発田市民第1号となり、亡くなるまで新発田に住んだ。東京・富士見町教会の会員であったが新発田教会では客員であり、1958年（昭和33年）に84歳で永眠し、キリスト教式の市葬が図書会館で執り行なわれた。

現在の新発田市立図書館の一階ホール脇に坪川記念室があり、坪川洵平に関する資料が展示されており、坪川洵平は故郷では覚えられている。だが、昨年四月には図書館は開館80周年を迎えたのではあるが、その精神は薄れつつあり、忘れられつつある。図書館玄関前に建てられた箴言碑と市民文化会館と図書館の間に建てられた頌徳碑の中の「自己完成の歌」に坪川洵平の精神のエッセンスが凝縮されている。坪川洵平の精神を想起しつつ、それらを心に深く刻みたい。

箴言碑

此處へ御越の方は

Seek	(探し求めなさい)
The Light of the Truth	真理の光
The Way of Honour	栄光の道
The Will to Work for Men	人のために働こうとする意志)

頌徳碑：自己完成の歌

「何事もまこと（真理）の道を究めつつ おめず はげめよ おのが努めを」

6. 結びに

以上、新発田出身の三人の人々の生涯とその働きを垣間見てきた。人文科学の視点から世界文学の原点であるダンテ研究家の山川丙三郎を取り上げたが、とりわけ文学とそれを生み出す宗教的霊性の関係について示唆を与えられる。また、社会科学の視点から農民運動から代議士になった井伊誠一を取り上げたが、そこからは小作農民という社会的に弱い立場の側に立って具体的に行動し、生涯にわたってかかわっていくことについて示唆が与えられる。さらに、百科全書主義の視点から町に図書館と図書会館を献げた実業家の坪川洵平を取り上げたが、自他ともに大いなる魂に触れて人格の完成を目指して生きていくことが示唆される。これらの三人はいずれも敬和学園大学の教育研究理念であるキリスト教的リベラル・アーツ精神の体現者であり、その実践者のモデルである。これらの人々の生涯と精神を地域社会から学び、また学んだことを教育現場で活かし⁽²⁾、それを再び地域社会に還元して、今後も益々地域循環型教育を実践していきたいと願っている。

註

- (1) リベラル・アーツ教育に関しては、山田耕太「ギリシア・ローマ時代のリベラル・アーツ教育と修辞学」『敬和学園大学研究紀要』第17号（2008年）、217-231頁；同「フィロンにおけるパイディア」『敬和学園大学研究紀要』第18号（2009年）、223-233頁；同『基礎演習ハンドブック（改訂第二版）』「第2章 リベラル・アーツについて」敬和学園大学、2005年；同『リベラル・アーツと福祉：福祉入門演習ハンドブック』「第1章 リベラル・アーツと福祉」敬和学園大学共生社会学科、2009年、参照。
- (2) 山川丙三郎に関して：石川重俊「上館から天国へ」2006年9月敬和学園大学チャペル・アッセンブリ・アワー講演、山田耕太「新発田が生んだダンテ研究家：山川丙三郎について」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第5号（2007年）、所収；井伊誠一に関して：佐藤浩雄「キリスト者井伊誠一と下越農民と私」『VERITAS』第2号（1995年）、所収、山田耕太「新発田教会120年史」『新発田教会創立120周年記念誌』（2008年）、所収；坪川洵平に関して：和田英夫「郷里に図書館と図書会館を寄贈した坪川」2009年6月敬和学園大学チャペル・アッセンブリ・アワー講演、山田耕太「新発田教会120年史」、所収、参照。